

JADS

JAPAN ART DOCUMENTATION SOCIETY

アート・ドキュメンテーション学会

JADS

アート・ドキュメンテーション学会

第36回（2025年度）年次大会 予稿集

2025年6月14日（土）・15日（日）

國學院大學 渋谷キャンパス及びオンライン開催

アート・ドキュメンテーション学会 第36回（2025年度）年次大会 プログラム・目次

【第1日目】

2025年6月14日（土）

12:30-18:10

12:30- 開会挨拶 田良島 哲（アート・ドキュメンテーション学会会長）

【シンポジウム】 ミュージアムの学芸業務に活かすコレクション情報管理 12:40-16:40 p.6

12:40- [趣旨説明] 田良島 哲（東京文化財研究所 客員研究員）

12:50- [報告 1] 村田 良二（東京国立博物館・博物館情報課長）
東京国立博物館・システム化の20年

13:40- [報告 2] 星野 靖二（國學院大學日本文化研究所所長・教授）
深澤 太郎（國學院大學博物館・教授）
及川 聡（國學院大學博物館 副館長／学術メディアセンター事務部主幹）
國學院大學における学術情報の整理と公開
——デジタルミュージアムのこれまでとこれから

14:50-15:00 休憩

15:00- [報告 3] 東海林 洋（ポーラ美術館・学芸員）
収蔵作品情報のデジタル管理とその課題

15:30- [報告 4] 三浦 梨絵（宇部市緑と花と彫刻の博物館（ときわミュージアム）・学芸員）
彫刻データベースと野外彫刻展アーカイブの成り立ちと日々の業務について

16:00-16:40 パネルディスカッション・質疑応答
進行：田良島 哲

【動向紹介】 p.8

16:40-17:10 [動向紹介] 安達 匠（國學院大學学術メディアセンター事務部図書館担当）
メタデータの「統合的発見環境」の整備と運用
——資料の壁を越えた先に

【第19回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・奨励賞授賞式】 17:20-18:10 p.9

【懇親会】 18:20- ※大会1日目終了後

会場：カフェラウンジ若木が丘 [学術メディアセンター1階]

【第2日目】

2025年6月15日（日）

10:00-17:30

【学会総会】 10:00-12:00 （会員限定）

【研究発表会〔発表1～4〕】 13:00-15:00 （発表25分 質疑5分） p.10

13:00-13:30 〔発表1〕 岩崎 絵里加（東京国立博物館）
情報と人の動きを統合した博物館における資料利用サービスの設計と実践
p.12

13:30-14:00 〔発表2〕 原 翔子（東京大学）
展覧会情報の階層的分析について
p.14

14:00-14:30 〔発表3〕 三谷 直哉（国立文化財機構 文化財防災センター）
令和6年能登半島地震文化財レスキュー事業日報の計量的分析
p.16

14:30-15:00 〔発表4〕 毛塚 万里（記録資料研究所／志度寺）
基礎自治体のデジタルアーカイブから MLA 連携の今後を考える
p.18

【ポスターセッション】 15:00-15:40 p.26

〔ポスター発表1〕 堀 咲子（筑波大学大学院／日本学術振興会特別研究員（DC2））
オランダの Society for Japanese Arts アーカイブズについて
p.26

〔ポスター発表2〕 矢部 恵子（国立歴史民俗博物館）
平沢「光彩」の仕事——光の差さない画室から生まれた「コレクション」を辿って
p.26

〔ポスター発表3〕 楯石 もも子（東京都江戸東京博物館）、鳥越 千尋（東京都江戸東京博物館）
東京都江戸東京博物館の収藏品管理システム——図書資料との一元管理を中心に
p.27

〔ポスター発表4〕 阿児 雄之（東京国立博物館）、北岡 タマ子（人間文化研究機構）、
田良島 哲（東京文化財研究所）、福島 幸宏（慶應義塾大学）、
本間 友（慶應義塾大学）、山内 利秋（九州医療科学大学）
博物館活動における情報・メディア論の位置付けについて
p.27

【第2日目】

2025年6月15日(日)

【活動紹介】 15:40-15:50 p.28

[活動紹介 1] 大内 静華 (奈良国立博物館)
奈良国立博物館のポスター収集の試み p.28

[活動紹介 2] コレクション SIG (アート・ドキュメンテーション学会)
コレクション SIG、発足! p.28

【研究発表会 [発表 5~7]】 15:50-17:20 (発表 25分 質疑 5分)

15:50-16:20 [発表 5] 若月 憲夫 (茨城大学)、杉浦 幸子 (武蔵野美術大学)
ドキュメンテーションの可能性
——市井のコレクションがアートとミュージアムの概念を拡張する p.20

16:20-16:50 [発表 6] 赤間 亮 (立命館大学アート・リサーチセンター)、
村上 佳奈子 (秩父宮記念スポーツ博物館)、
新名 佐知子 (秩父宮記念スポーツ博物館)
スポーツ雑誌記事への効果的なアクセス作成の手法
——『アサヒ・スポーツ』を事例に p.22

16:50-17:20 [発表 7] 川口 雅子 (国立アトリサーチセンター)、
谷口 英理 (国立アトリサーチセンター)、
石黒 礼子 (国立アトリサーチセンター)、
手銭 和加子 (株式会社 TEZEN)
アートプラットフォームジャパンにみる情報連携と対外発信をめぐる課題 p.24

17:20-17:30 閉会挨拶 本間 友 (アート・ドキュメンテーション学会 幹事長)

『アート・ドキュメンテーション研究』第34号 原稿募集 p.29

アート・ドキュメンテーション学会 刊行物販売のお知らせ p.30

アート・ドキュメンテーション学会 入会のご案内 p.31

【見学会】

6月14日（土） 10:30 - 11:30（※10:20集合）

國學院大學博物館

國學院大學博物館の概要および開催中の企画展について、同館副館長 内川隆志先生よりご解説をいただきます。

國學院大學博物館 見学会

展覧会：企画展「江戸・東京の祝祭とおしゃれ- 飾る都市と人 -」

解説：内川隆志（國學院大學博物館 副館長／文学部教授）

集合：10:20、國學院大學博物館エントランス前

見学会にご参加いただくには、年次大会へのお申込みが必要ですが、見学会への個別のお申込みは不要です。
國學院大學博物館へのアクセス <http://museum.kokugakuin.ac.jp/access/>

企画展「江戸・東京の祝祭とおしゃれ- 飾る都市と人 -」

会 期：2025（令和7）年4月26日（土）～6月22日（日）

会 場：國學院大學博物館 企画展示室

開館時間：10時～18時（最終入館 17時30分）

休館日：毎週月曜日、4月30日、5月1日、2日（祝日は開館）

入館料：無料

國學院大學博物館ウェブサイト <http://museum.kokugakuin.ac.jp>

企画展ウェブサイト http://museum.kokugakuin.ac.jp/special_exhibition/detail/2025_edohare.html



外観



内観

左右ともに
画像提供：國學院大學博物館

國學院大學図書館

大会1日目（6月14日（土））につきましては、年次大会参加証（JADS 名札）の提示により図書館にご入館いただけます。（自由見学）

開館時間：渋谷キャンパス図書館 月～土 9:00～22:00

<https://www.kokugakuin.ac.jp/student/lifesupport/library>

シンポジウム 「ミュージアムの学芸業務に活かすコレクション情報管理」 6月14日（土）12:40 - 16:40

ミュージアム運営の基盤である作品・資料の内包する情報と価値を適切に把握し、社会と共有するための解決の道筋の一つとしてコレクション情報のデジタル化が提起されて久しく、近年の博物館法改正により、「博物館資料に係る電磁的記録の作成と公開」が法令上の業務として位置付けられるに至った。しかし、多くのミュージアムの現場では、学芸業務とデジタル化との関係について試行錯誤が続いており、理論的な裏付けと、経験の共有が求められている。

今回、長く歴史的な資料コレクションを構築してきた國學院大學博物館と共催する年次大会で、この課題に取り組んできた美術館・博物館の実践に関する報告をいただくとともに、コレクション情報のデジタル化を学芸業務に対してどのように積極的に活用してゆくかという展望を示すことを企図して、シンポジウムを開催する。

「東京国立博物館・システム化の20年」

村田 良二

東京国立博物館では、2005年に所蔵品管理のためのデータベース「protoDB」を構築し、機能追加と改善を重ねて20年が経過した。開発当初から現在まで、システム化の展開を振り返りながら、博物館業務の変化を辿る。またこの間、並行して画像管理システムや研究情報アーカイブズの開発も進み、国立文化財機構全体としても「e 国宝」リニューアルや「ColBase」公開を行ってきた。これらの経験から、博物館でのシステム化の意義や、システム開発・導入のベストプラクティスを改めて考えたい。また、現在の新しい技術的な潮流を踏まえながら、今後の博物館におけるシステムの役割を検討し、これからの取り組みについて考えていることを紹介する。

村田 良二（むらた りょうじ）

東京国立博物館学芸企画部博物館情報課長、

文化財活用センター・デジタル資源担当課長。専門は博物館情報学。

著作に「国立博物館所蔵品統合検索システム『ColBase』——過去・現在・未来」（分担執筆、『デジタルアーカイブ・ベーシックス4 アートシーンを支える』勉誠出版、2020年）、「文化財情報の構造と組織化について——データベース化の実践をもとに」（東京国立博物館紀要、第52号、2017年）など。

「國學院大學における学術情報の整理と公開

——デジタルミュージアムのこれまでとこれから」

星野 靖二、深澤 太郎、及川 聡

國學院大學では、1990年代後半から大学所蔵資料のデジタル化と、調査研究活動の結果として生成された学術情報のWeb公開を進めている。また、日本文化研究所を中心として、学内の諸機関が作成したデータベースの継続的・一元的管理を目標とした「デジタルミュージアム」を構想してきた。もっとも、國學院大學博物館が収蔵する有形文化財のようなモノの情報と、万葉集神事言辭典などを含むコトの情報を均しく取り扱うためには、なお検討すべき課題を残しているが、ここ数年で外部データベースとの連携も進捗を見ている。この発表では、かかるデジタルミュージアムを取り上げ、その成り立ち、取り扱っているデータの概要、そして具体的な技術的側面について紹介したい。

【シンポジウム】

星野 靖二（ほしの せいじ）

國學院大學日本文化研究所所長・教授

國學院大學における有形・無形の学術資産を管理するデジタルミュージアム構築のハブを担当。

深澤 太郎（ふかさわ たろう）

國學院大學博物館・教授

博物館収蔵資料の再整理と調査研究を担当。主に、考古・民俗・歴史資料と、そのデジタルデータ化を進めている。

及川 聡（おいかわ さとし）

國學院大學博物館副館長／研究開発推進機構事務課主幹

デジタルミュージアムの運営を担当。外部データベースとの連携など、新しい取り組みを模索中。

「収蔵作品情報のデジタル管理とその課題」

東海林 洋

ポーラ美術館では 2002 年の開館以来、収蔵作品情報をデジタルで一元管理してきた。これにより、情報共有の円滑化、保存性の向上、公開の柔軟性といった利点が得られ、災害時のデータ保全という点でも紙媒体に比べて大きな強みがある。一方で、維持管理のコストや IT スキルを持つ人材の不足、担当者への属人化といった課題もある。現代アートの分野では紙カードでは対応困難な作品も多く、来歴の蓄積や多言語対応など、必要な情報は今後さらに増えていく。作品データのデジタル化は、単なる効率化の手段ではなく、未来への責任である。本発表では、その現状と課題を共有したい。

東海林 洋（しょうじ よう）

ポーラ美術館・学芸員

2011 年より現職。専門は近現代美術史。展覧会の企画や作品の保存など作品の管理とともに収蔵作品データベースを担当。担当展覧会に「シュルレアリスムと絵画——ダリ、エルンストと日本の『シュール』」（2019-2020 年）、「ピカソ 青の時代を超えて」（2022-2023 年）、「モダン・タイムス・イン・パリ 1925—機械時代のアートとデザイン」（2023-2024 年）など。

「彫刻データベースと野外彫刻展アーカイブの成り立ちと日々の業務について」

三浦 梨絵

宇部市（山口県）が 1961 年から取り組む彫刻事業は、野外彫刻の国際コンクール「UBE ビエンナーレ（現代日本彫刻展）」の開催と、同展の終了後に出品作を市内へ恒久設置する 2 事業が一体となったものです。これらの取り組みは、全国で展開された彫刻のあるまちづくりの先駆的事业として評価されてきました。文化的価値を有する財産であり、観光資源であり、教育ツールでもある“野外彫刻”の多面性をどのようにデータベース化していくか。一般の利用者をはじめ、歴代の出品アーティストや、研究者に情報を開き、地域の活性化と彫刻分野の活性化をめざす、宇部市の彫刻データベースと野外彫刻展アーカイブの概要と展望をご紹介します。

三浦 梨絵（みうら りえ）

宇部市緑と花と彫刻の博物館（ときわミュージアム）・学芸員

東京藝術大学大学美術館、東京国立博物館、東京文化財研究所等に非常勤として勤務したのち、山口県宇部市に移住し、2009 年から学芸員として彫刻事業を担当。野外彫刻の国際コンクール「UBE ビエンナーレ（現代日本彫刻展）」業務の全般、市内野外彫刻の維持管理のほか、彫刻データベースの充実、向井良吉・柳原義達を主とするコレクション展の企画、「手話で語る彫刻（動画制作）」、「彫刻の丘で音声ガイドをつくろう（学校連携）」などの普及事業に取り組む。

趣旨説明・パネルディスカッション進行

田良島 哲（たらしま さとし）

東京文化財研究所 客員研究員。元東京国立博物館博物館情報課長。編著書に『ミュージアムの未来をつくる 博物館情報・メディア論』（2025）。

【動向紹介】

6月14日（土） 16:40 - 17:10

メタデータの「統合的発見環境」の整備と運用——資料の壁を越えた先に

安達 匠（國學院大學図書館／学術メディアセンター事務部図書館担当）

情報が氾濫している現代において、デジタルを含めた情報の多様化は必然となっている。そうした中、図書館で扱う資料も紙製の図書媒体に限らず多岐に亘っており、ユーザーである利用者への的確な情報を提供出来るようにするため、文書の昔から連綿と継続されてきた目録の整備は欠かせない。その業務として長年目録の整備に勤しんできた図書館員は、時代を経てメタデータ整備をも業務に含めるようになり、今では情報提供のためのメタデータの環境整備の重要性が高まっている。

ここでは大学図書館を中心にデジタルコンテンツ環境について触れながら、国立情報学研究所と大学図書館で進めている「これからの学術情報システム構築検討委員会」のメタデータの「統合的発見環境の整備」を紹介したい。

安達 匠（あだち しょう）

筑波大学図書館情報メディア研究科博士後期課程満期退学

國學院大學図書館（学術メディアセンター事務部図書館担当）勤務

「大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議」設置の「これからの学術情報システム構築検討委員会」委員・作業部会「ユーザーグループ運営作業部会」主査

第19回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同奨励賞 授賞式

2025年6月14日

第19回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同奨励賞選考委員会

標記の賞について選考の結果、会員の皆様より推薦いただいた候補の中から「学会賞」1件、奨励賞評価委員会からの推薦による候補者から「奨励賞」2件の授賞を決定しました。今後とも本賞の発展にご協力くださいますようお願いいたします。

第19回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同奨励賞選考委員会

委員長：田窪直規 委員：田良島哲、嘉村哲郎、黒田結花、本間友

第19回 野上紘子記念 アート・ドキュメンテーション学会賞

受賞： 赤間 亮 氏 ならびに 立命館大学アート・リサーチセンター

長年にわたり日本芸術や伝統芸能に関わる文化資源のデータベース化・公開を牽引し続けている功績に対して

授賞理由：

赤間氏は、日本の伝統芸能・工芸等の文化資源のデータベース化を四半世紀にわたり行い、世界に発信している。1998年の立命館大学アート・リサーチセンター設立以降は、主要メンバーのひとりとして、情報科学に関する文理連携を前提とした研究を促進しながら、有形・無形のアート作品の収集・整理・デジタル化・発信に関わる技術を養う方法を編み出してきた。さらには、そのノウハウを日本国内にとどまらず、大英博物館をはじめとする国外の主要な美術館・博物館と共有することの重要性を、自らの行動をもって示し続けている。その成果として、国外に所蔵されている多くの日本の古典籍ならびに浮世絵の存在が明らかとなり、データベース化・公開を通じて共有された。同時に、アート・ドキュメンテーションに携わる人材も精力的に育成している。

現在、赤間氏がセンター長を務める立命館大学アート・リサーチセンターは、国内外のアート分野に関する文字・画像情報を検索・閲覧を可能とする、ポータルサイトの役割を担っている。加えて、本センターは、文部科学大臣認定の「国際共同利用・共同研究拠点」、「日本文化デジタル・ヒューマンティーズ拠点」として、デジタルアーカイブを基盤にオンライン上での研究活動を支援するだけでなく、研究成果によるあらたなデジタルアーカイブを構築するための技術サポートならびに環境等を提供し、その実現も支援している。

まさにこれからのドキュメンテーションのひとつの在り方を、アートの分野においてグローバルな視点をもって示し、現在もたゆまず活動を継続している赤間氏と立命館大学アート・リサーチセンターの功績は実に大きなものである。

以上の成果を評価し、第19回野上紘子アート・ドキュメンテーション学会賞を授与する。

【学会賞の概要】

以下a)、b)、c)のいずれかに該当するものを選出する。対象は会員に限らない。

a) Museum、Library、Archivesをはじめとするアート・ドキュメンテーション関係業務の現場において、効果的かつオリジナリティを発揮した者、あるいは機関。

b) アート・ドキュメンテーション分野の振興発展に寄与した功績が認められる者、あるいは機関。

c) アート・ドキュメンテーションに関する論文・記事(学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』、『アート・ドキュメンテーション通信』への掲載に限らない)、図書、展覧会、データベース、ウェブサイト等のなかから優れたもの。対象となる論文・記事、図書、展覧会は、受賞年の前年度を含む過去3年間に発表されたものとする。

第19回 野上紘子記念 アート・ドキュメンテーション奨励賞

受賞： 新里 直之 氏 (京都芸術大学舞台芸術研究センター) 受賞： 大坪 逸貴 氏 (サイフォン合同会社)

研究発表「民間小劇場におけるアーカイブ構築の意義」
(JADS第35回(2024)年次大会 研究発表会) に対して

授賞理由：

新里直之氏の研究は、アーカイブ構築に関する研究や実践の蓄積が発展途上にある民間小劇場を対象とした概況調査を行うとともに、具体的な事例に基づいてアーカイブ手法と課題について検討したものである。民間・地域の小規模な活動や文化をどのように拾い上げ継承するかという挑戦的かつ新規な課題設定を行っている点、また全国の劇場と個別の劇場の状況に適切に目を配り、実現可能な手法を提案している点を評価するとともに、今後の一層の活躍に期待し、奨励賞を授与する。

研究発表「図書館・博物館複合型文化施設における共創型デジタルアーカイブ構築の試み」(2024年度JADS第17回秋季研究集会) に対して

授賞理由：

大坪氏は、地域の多様な人材や状況に適合する利用者向けサービスとして、行政では実現の難しい地域住民参加型アーカイブの実装に取組み、さらに自治体担当者との共創的な実践とその可視化にも意欲的に発展させている。ミュージアムの役割がデジタル化・博物館法の改正等を背景に改めて問われている中で、大橋正司氏、白井雅明氏との共同研究発表に見られるように先進的な取組と基本的な実務基盤の整備の両方をバランスよく融合させようとしている姿勢を評価する。今後の一層の活躍に期待し、奨励賞を授与する。

【奨励賞の概要】

アート・ドキュメンテーション分野の発展における将来の貢献を奨励するため、本会が主催する研究発表会、シンポジウム、セミナー、ポスターセッション、活動紹介等で発表した登壇者、および『アート・ドキュメンテーション研究』に掲載された論文・記事の著者のなかから優れたものを選出する。対象は会員に限り、受賞年の前年度に発表、刊行されたものとする。

※第20回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞の推薦募集は、『アート・ドキュメンテーション通信』、および学会ウェブサイト、学会メーリングリスト等で告知いたします。会員の皆様には、積極的なご推薦をお願い申し上げます。

【研究発表会】

6月15日（日） 13:00 - （発表25分 質疑5分）

発表者プロフィール

13:00 - 15:00

岩崎 絵里加（いわさき えりか）

東京国立博物館 学芸企画部 博物館情報課 情報管理室
アソシエイトフェロー
名古屋大学大学院情報学研究科社会情報学専攻博士前期課程（情報学）修了。早稲田システム開発株式会社を経て、2023年から現職。専門は社会情報学、博物館情報学。博物館資料のデジタル化のディレクション業務、デジタル化により作成されたコンテンツを利活用するための情報基盤開発・運用業務に従事している。

原 翔子（はら しょうこ）

東京大学大学院学際情報学府博士課程、情報学環特任研究員
慶應義塾大学商学部卒業。東京大学大学院学際情報学府修士課程修了（社会情報学）後、同博士課程在学中。情報学環特任研究員、独立行政法人日本芸術文化振興会助成活動主任調査分析研究員を兼任。専門はネットワーク論。

三谷 直哉（みたに なおや）

国立文化財機構文化財防災センター 研究員
同志社大学文学部文化学科国文学専攻卒業。IT 関連企業でのシステムエンジニアを経て、2023年から現職。2024年デジタルアーキビスト資格（特定非営利活動法人日本デジタルアーキビスト資格認定機構）を取得。専門は文化財情報、文化財防災、国文学。

毛塚 万里（けづか まり）

武蔵大学大学院修士課程修了（日本中世史）。国立・私立の収集アーカイブズ機関、文書管理専門企業や博物館施設運営受託企業等での正規・非正規雇用を経て2015年から現職。認証アーキビスト。私大非常勤講師（学芸員課程担当）。専門はアーカイブズ学（私文書の保存整理、目録作成）。共著書に『志度寺縁起絵』（平凡社2019）など。

15:50 - 17:20

若月 憲夫（わかつき のりお）

茨城大学人文社会科学部 非常勤講師
東京理科大学理工学部情報科学科卒業。株式会社乃村工藝社入社。在職中に文化環境研究所、平和祈念展示資料館出向、東海大学、駿河台大学、宮城大学、岩手大学で非常勤講師。2017年株式会社乃村工藝社定年退職。同年からフリーランス及び現職。専門は博物館学、展示学、ミュージアム・プランニング。編著作に『博物館情報学シリーズ4 ミュージアム展示と情報発信』（樹村房、2021）。DSA空間デザイン賞特別賞<復興支援賞>受賞／震災からよみがえった東北の文化財展（2012）。

杉浦 幸子（すぎうら さちこ）

武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科 教授
お茶の水女子大学文教育学部哲学科美学美術史専攻卒業。英国ウェールズ大学院教育学部修士課程修了。2001年横浜トリエンナーレ教育プログラム担当、森美術館パブリックプログラムキュレーター、京都造形芸術大学プログラムコーディネーターなどを経て、2012年武蔵野美術大学。2014年から現職。専門は美術館教育学、鑑賞教育学、AX デザイン、アートプロジェクトデザイン。主な共著書に『ミュゼオロジーの展開 経営論・資料論』（武蔵野美術大学出版局、2016年）、『美術の授業の作り方』（同左、2020年）など。

赤間 亮（あかま りょう）

立命館大学教授、
立命館大学アート・リサーチセンター長
早稲田大学文学研究科単位取得退学。早稲田大学演劇博物館助手、立命館大学文学部専任講師などを経て、2002年から現職。専門は日本演劇・文化情報学。主な共著に『絵入狂言本総覧』（青裳堂書店、2025）、『文化情報学ガイドブック 情報メディア技術から「人」を探る』（勉誠出版、2014）、著書に『図説江戸の演劇書』（八木書店、2003）、他。

村上 佳奈子（むらかみ かなこ）

秩父宮記念スポーツ博物館学芸員（デジタルアーカイブ担当）
立命館大学大学院文学研究科博士課程前期課程（文化情報学）修了。立命館大学アート・リサーチセンタースタッフを経て、2021年から現職。

新名 佐知子（にいな さちこ）

秩父宮記念スポーツ博物館
九州大大学院博士後期課程満期退学。専門は教育学、博物館学。九州国立博物館研究補佐員などを経て、2012年より現職。2016～2020年度、スポーツ庁のスポーツ・デジタルアーカイブ構想事業委員を務めた。

【研究発表会】

川口 雅子（かわぐち まさこ）

国立アトリサーチセンター情報資源グループリーダー
東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。在学中マールブルク大学（ドイツ）留学。財団法人ポーラ美術振興財団ポーラ美術館、国立西洋美術館を経て2023年より現職。専門は美術館情報論。おもな共編著に『松方コレクション 西洋美術全作品』全2巻（国立西洋美術館、2018-2019年）、共著に『ミュージアムの未来をつくる博物館情報・メディア論』（美学出版、2025）他。2021年より内閣府魅力ある新国立公文書館の展示・運営の在り方に関する検討会構成員。2024年より経済産業省委託我が国企業のデザイン資源を活用した海外展開促進事業有識者。第15回西洋美術振興財団賞・学術賞受賞（2020年）。

谷口 英理（たにぐち えり）

国立アトリサーチセンター情報資源副グループリーダー
東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。博士（美術）。国立新美術館学芸課美術資料室長を経て2023年より現職。専門は日本近現代美術史。国立公文書館認証アーキビスト。近年は美術史とアーカイブズ学の交差する地点で研究、実践を行う。主な論文に「アート振興の基盤としてのアーカイブズの整備に向けた三つの論点」（『DNP 文化振興財団 学術研究助成紀要』5号、2023年）、「長谷川三郎における内在化された〈写真〉」（『美術史』185冊、2018年）他。共著に『さまよえる絵筆：東京・京都戦時下の前衛画家たち』（みすず書房、2021年）他。

石黒 礼子（いしぐろ れいこ）

国立アトリサーチセンター情報資源グループ主任研究員
学習院大学文学部哲学科（美学・美術史専攻）卒業後、民間企業に勤務する傍ら、NTT インターコミュニケーション・センター [ICC] にて司書業務に従事。2005年8月から2022年8月まで金沢21世紀美術館にてアーキビストとして勤務し、コレクション情報の管理や美術館活動のアーカイブ化に取り組むなど、情報資源の整備に携わる。2022年9月より、国立アトリサーチセンター（仮称）設置準備室を経て現職。全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」や国立美術館の所蔵作品総合目録システムなど、コレクション情報の基盤整備を担当。

手銭 和加子（てぜん わかこ）

株式会社 TEZEN 代表取締役、アートプロジェクトディレクター

国際基督教大学在学中ロンドン大学経済学部へ留学。早稲田大学にて学芸員資格取得。現代美術画廊勤務を経て、2008年にアート・マネジメント・コンサルティング会社を設立し、以来15年以上に渡り日本近現代美術関連のプロジェクト運営実務に携わる。2018年に RICHARD & TEZEN を設立し、国内外の顧客に対するサービスを提供するほか、出雲地方の美術工芸品の保存・展示を行う手銭美術館の運営にも従事。2019 年より全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」をはじめとするアートプラットフォームジャパンの推進を担当する。

情報と人の動きを統合した博物館における資料利用サービスの設計と実践

Design and Practice of Document Availability Services in Museums Combining Information and Human Activities

岩崎 絵里加*
IWASAKI, Erika

Resume:

本発表は、業務効率や利便性を向上させることを目的として、東京国立博物館の館内外に向けたマイクロフィルムデジタルスキャン画像利用サービスを再設計しつつ運用を続けている、実践例の報告である。

1. 資料利用サービスの概要

東京国立博物館(以下、東博と称す)は、約3,600本のマイクロロールフィルムを所蔵している。そして、東京国立博物館資料館(以下、資料館と称す)にて、これらのマイクロフィルム資料の閲覧・複写サービスを提供している。マイクロフィルム資料は、東博所属の研究員はもちろん、国内外の研究者に参照され、研究などに活用されている。また東博内では、館史資料を撮影したものを中心に、館蔵品管理業務にも活用されている。

資料保護の観点からも、デジタルスキャンを済ませたロールフィルム約2,700本分については、デジタルスキャン画像の閲覧・複写を供している。そして、業務効率や利便性を向上させることを目的として、図1のような形でデジタルスキャン画像をプラットフォームに集約し、情報管理と業務の再設計を行った。本稿では、サービス再設計の要点と、運用を実践しての気づきについて報告する。

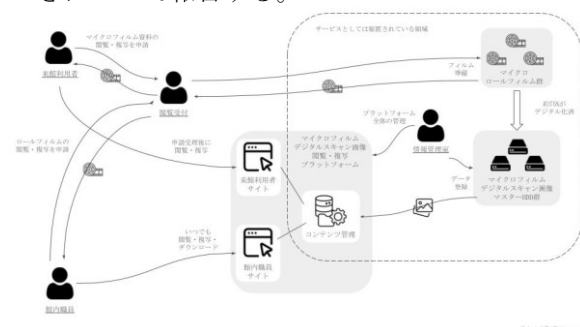


図1 マイクロフィルム閲覧・複写サービス全体図

2. 情報管理の設計について

2.1 所蔵マイクロフィルムの概要

東博が所蔵するマイクロフィルムの多くは、自館が所蔵する古典籍や館史資料といった資料を撮影して独自作成したものである。1本のロールフィルムに約600コマを収録しており、多くのロールフィルムは複数冊の撮影画像を収録している。また、撮影対象の資料には、1冊で1,000ページを超えるものもある。そのため、

同一資料の画像が2つ以上のロールフィルムにまたがって収録されている例もある。

2.2 マイクロフィルム利活用の課題

上田によると、マイクロフィルムの目録作成では、記述の対象がセットやリールであることが一般的で、マイクロフィルムを利用するには、図書目録とマイクロフィルムの収録状況を整理した目録の両方にあたる必要がある場合が多く、その面倒さはマイクロフィルムが利用されない一因となっている¹。

資料館では、OPACにマイクロロールフィルム番号を入れている。そのため、図書目録からマイクロロールフィルムを特定することまでは容易にできていた。しかし、当該資料の画像が当該リールの何コマ目から始まるのかについては、図書目録とは別の、マイクロフィルムの目録にあたって確認する必要があった。この検索性の低さが、マイクロフィルムの利便性の低さをもたらしていた。

2.3 課題解決のための情報設計

利便性向上のため、マイクロフィルムのデジタルスキャン画像について、撮影対象の資料の単位で整理し、閲覧・複写サービスのプラットフォームとしても利用できるデータベースを構築した。また、このデータベース構築には、オープンソースソフトウェアのOmekaSを用いた²。

1) 識別子について

本事例では、マイクロフィルムデジタルスキャン画像を、撮影対象ごとにまとめて1つのアイテムとして扱う構造のデータベースを構築した。したがって、データベース上のアイテムの識別子となるのは、撮影対象の資料に付与された識別子である。撮影対象には、古典籍や館史資料などさまざまな種別の資料があり、資料種別ごとに識別子の体系が異なっている。

撮影対象に振られた識別子と別に、データベース独自の番号として、マイクロロールフィルム番号とリール内での出現順を組み合わせた番号(以下、マイクロフィルム資料番号と称す)を振っている。例えば、番号1840番のロールフィ

*いわさき えりか(東京国立博物館)

ルムの 3 番目に収録された資料であれば「MF1840-03」といった形でマイクロフィルム資料番号を付与している。2 つのロールフィルムにまたがって収録された画像をまとめたアイテムには、マイクロフィルム資料番号を 2 つ振っている。

マイクロフィルム資料番号を付与することで、データベースは、資料単位の構造と、ロールフィルム単位の構造の、両方の情報構造を再現するものになった。

2) 閲覧サイトについて

マイクロフィルム化されている資料のうち、特に館史資料は、機微情報が含まれるものも多く、現在は一般公開を停止している。一方で、館史資料には東博の職員が日々の仕事を進める上で必要な情報が記載されている。さらに、個人情報保護等のために必要な処理をした上で、将来的に館史資料の公開を再開するためには、館内で館史資料の内容確認をスムーズに行うための体制や情報基盤を整える必要がある。そのため、マイクロフィルムデジタルスキャン画像の公開は、館史資料を除外した来館利用者向けと、館史資料を含む館内職員向けの、2 系統に分ける必要があった。

本事例では、OmekaS の機能を活用して、それぞれの系統のサイトを用意して、公開する画像を切り分けるという方法を取った。また館史資料を含むサイトについては IP アドレスを制限する設定を行い、不正アクセスを防ぐようにした。

OmekaS は、画像データ自体の状態と、サイト上での公開/非公開の状態とを、分離して管理できる仕様となっている。ある資料について、一部ページの画像のみ非表示にして閲覧・複写に供すことも可能である。見せる、見せないの細かいコントロール調整が容易な仕様は、情報保護と情報公開のバランスを取るのに適している。

3. ワークフローの設計について

マイクロフィルム閲覧・複写サービスの受付窓口業務の担当者が担っているタスクは多く、また、サービスプラットフォームの導入に伴って業務手順を変更・効率化した箇所が多い。ここではその一例を紹介する。

効率化できた業務として、複写料金の算出がある。従来、閲覧受付担当者は、来館利用者が

複写した紙の束を受け取り、枚数を数えて、料金を算出していた。サービスプラットフォームを導入してからは、アイテムごとの複写枚数が記録された印刷レポートをプリンターから出力し、複写枚数の合計を出して、料金を算出している。これにより、業務負荷が減少した。

また、サービスプラットフォームを運用する以前は、マイクロフィルムデジタルスキャン画像の閲覧を希望する館内職員も、資料館に足を運んでマイクロフィルムデジタルスキャン画像を閲覧していた。サービスプラットフォームを運用するようになり、館内職員は自席または自宅等のリモートワーク環境でマイクロフィルムデジタルスキャン画像を閲覧できるようになった。そのため資料館の閲覧受付担当者の視点に立つと、館内職員対応という業務が削減されたと見ることができる。

4. まとめと今後の課題

4.1 まとめ

本事例では、サービスの中心に情報のハブになるプラットフォームを置き、サービスに携わる人々の動きに合わせて改善を行った。また、プラットフォームを中心に情報の見通しを向上させることによって、業務効率化や利便性向上を実現した。根本が指摘するように、「デジタルネットワークが社会的なインフラの一つになっても、それはあくまでも宇宙や自然、地球環境を含めた世界、人間社会の生活などのリアルな空間をつなぐメディア空間にすぎない」³。デジタルのプラットフォームを業務効率や利便性の向上に資するものにするためには、デジタルのプラットフォームがそれだけで閉じてしまわないよう、リアル空間の人々の動きとどう関わり合うのかに意識を向けて、サービス全体を設計することが重要である。

4.2 今後の課題

マイクロフィルムデジタルスキャン画像の利便性が高まり、閲覧機会が増えたことで、新たに資料の内容解読にかかる課題が発見された。撮影対象の資料は手書き文字で書かれたものが多く、画像を見たところで内容を読み取れないという声が多く寄せられた。何らかの方法で、活字の翻刻文を参照しながら画像が見られる状況を作り出すことが課題である。

¹ 上田修一「メディアとしてのマイクロフィルム」, 小島浩之 編『図書館資料としてのマイクロフィルム入門』日本図書館協会, 2015 年, pp. 15-32.

² OmekaS, <https://omeka.org/s/>, Accessed 2025-04-22.

³ 根本彰「図書館情報学」, 日本図書館情報学会 編『図書館情報学事典』, 2023 年, pp. 38-41.

展覧会情報の階層的分析について

Hierarchical Analysis of Exhibition Information: A Methodological Approach

原 翔子*

HARA, Shoko

Resume:

本研究は、展覧会情報を体系的に分析する方法論を提案する。従来の展覧会評価は鑑賞者反応に依存してきたが、本研究では展覧会情報を(1)基本情報、(2)コンテンツ、(3)文脈の三層構造に分類し、各層の入手可能情報を整理することで、展覧会を相対的に分析することが可能になる。大規模企画展を対象とした予備分析を通じて、本研究の方法論の可能性と限界を確認した。

1. はじめに

展覧会は美術・文化の発信媒体として重要な役割を果たしているが、その実態を振り返る方法は鑑賞者のアンケートや批評家の主観的評価に依存する傾向が強く、客観的かつ体系的な分析手法は確立されていない。本研究では、展覧会情報を階層的に捉え、企画者自身が展覧会の成果を客観的に評価できる分析フレームワークの構築を企図する。具体的には、展覧会情報を三層のレイヤーに分類し、各レイヤーにおける分析指標を設定することを目指す。その前段として、各レイヤーにどのような変数が存在するのかを予備分析によって明らかにする。これにより、キュレーションの意図と実際の展示効果の関係性を可視化し、次回の企画に生かすサイクルが成立すると期待される。

2. フレームワーク

従来の展覧会評価は来場者数や満足度などの定量的指標、あるいは批評家による定性的評価に依存してきた。本研究では、(1)基本情報レイヤー、(2)コンテンツレイヤー、(3)文脈レイヤーの三層構造による分析フレームワークを提案する。これら三層の情報を統合的に分析することで、展覧会同士が相対化される。すなわち、展覧会を多角的に把握し、比較分析することが可能となる。

2.1 基本情報レイヤー

基本情報レイヤーには、展覧会の物理的・運営的側面に関する情報が含まれる。具体的には、開催期間、場所、主催者、予算、来場者数などの基礎的データが該当する。このレイヤーの分析指標

としては、目標来場者数に対する達成率、予算効率(来場者一人あたりのコスト)、メディア露出度(記事掲載数、SNS言及数等)などが挙げられる。これらの指標により、展覧会の運営面での成果を客観的に評価することが可能となる。

2.2 コンテンツレイヤー

コンテンツレイヤーは、展覧会の内容そのものに関する情報で構成される。展示作品のリスト、展示室の配置図、解説文、照明や音響などの展示手法が含まれる。分析指標としては、作品の時代・地域による分布状況、展覧会テーマとの関連度、展示密度(単位面積あたりの作品数)、解説文の難易度などが設定できる。これらの指標により、展示内容の構成バランスや鑑賞者への情報伝達の効果性を評価することができる。

2.3 文脈レイヤー

文脈レイヤーは、展覧会が提示する意味や価値に関する情報層である。作品間の関連性、歴史的・社会的背景、キュレーターの意図、教育的視点などが含まれる。分析指標としては、ナラティブの一貫性、テーマの深度、学術的貢献度、社会的インパクトなどが挙げられる。このレイヤーの分析により、展覧会が観客に与える知的・感情的影響力を評価することが可能となる。

3. 研究対象と研究方法

本研究では、提案した三層構造フレームワークの有効性を検証するため、展覧会情報の予備分析を実施した。

3.1 分析対象

分析対象として2014年に国立新美術館で開

*はら しょうこ(東京大学大学院学際情報学府)

催された「オルセー美術館展 印象派の誕生 ―描くことの自由―」を選定した。選定の理由は次の通りである。まず、国立新美術館で開催された企画展であることから、時間が経っても情報を入手しやすいことが挙げられる。次に、2025 年 10 月からオルセー美術館の所蔵作品が国立西洋美術館に展示されることが決まっていることを重要視している¹。企画の主体と実施される美術館は異なるが、同じ美術館の名を冠した大規模な企画展示で成果を比較することは、その展覧会の特徴を把握することにも繋がる。

3.2 研究方法

データ収集は複数の情報源から行った。基本情報レイヤーについては公式発表、美術関連の情報を提供するウェブページの記事から開催概要や来場者数などの基礎データを抽出した。コンテンツレイヤーについては公式図録を用いて、作品ジャンルや時代区分などを分類した。文脈レイヤーについては、今後さらなる検討が必要になる。キュレーターのインタビュー記事や展覧会の批評記事から、展示意図や歴史的文脈の提示方法に関する情報を整理することもできるだろう。しかし、定性的評価には評価者の観点が反映されている。鑑賞体験が鑑賞者の数だけあることを踏まえると、媒体の数や規模、評価者に影響される部分が大きくなる。得られる情報が複雑化するほど、企画者が意図していた文脈との間に差異が生じるというのは容易に推測できる。そこで、本研究では、コンテンツレイヤーで得られる情報からの文脈抽出を検討する。

4. 三層構造による予備分析結果

2014 年に国立新美術館で開催された「オルセー美術館展 印象派の誕生 ―描くことの自由―」を対象に、提案した三層構造分析フレー

ムワークを適用した結果を以下に示す。

4.1 基本情報レイヤー

展覧会概要ページ²から得られた情報は、会期、開館時間、会場、主催、後援、特別協賛、協賛、協力、観覧料、講演会やシンポジウムを含む関連イベントの実施状況などである。総入場者数については、入場者数レポートから別途入手する必要がある³。

4.2 コンテンツレイヤー

展示内容について、構成は先述の展覧会概要から入手することができる。詳細な展示作品の内容については、作品名、作家、制作年、サイズ、制作手法など、図録に掲載されている情報が得られる。

4.3 文脈レイヤー

企画展では章立てと動線により鑑賞者に一連の文脈を提示している。個別の作品の詳細からその作品が置かれた文脈を推測することは困難である。しかし、コンテンツレイヤーで入手される情報を組み合わせることで、文脈が表現されるようになるだろう。

5. おわりに

予備分析を通じて、本研究のフレームワークが展覧会の比較分析に寄与しうることが示された。このフレームワークを展覧会の企画段階から導入することで、企画意図と展示効果の整合性を高める実践的活用も期待される。

今後の課題としては、文脈レイヤーの情報分析にあたっての具体的な検討を進めることが挙げられる。加えて、多様な展覧会タイプへの適用による汎用性の検証等も必要だろう。

本研究が提案する体系的分析手法により、展覧会情報のデジタルアーカイブとしての価値も高まり、美術史研究や展示学の発展に寄与することを期待する。

¹ オルセー美術館所蔵 印象派 室内をめぐる物語, 国立西洋美術館, <https://www.orsay2025.jp/>, (Accessed 2025-05-07) .

² オルセー美術館展 印象派の誕生 ―描くことの自由― 展覧会概要, 国立新美術館, https://www.nact.jp/exhibition_special/2014/orsay2014/, (Accessed 2025-05-07) .

³ 【入場者数レポート】 2014 年後半の主な展覧会の話題から, Art Annual online, 2014 年 12 月 17 日, <https://www.art-annual.jp/news-exhibition/news/44126/>, (Accessed 2025-05-07) .

令和6年能登半島地震文化財レスキュー事業日報の計量的分析

Quantitative Analysis of Daily Reports from Cultural Heritage Salvage Operations Following the 2024 Noto Peninsula Earthquake

三谷 直哉*

MITANI, Naoya

Resume:

令和6年能登半島地震の発生を受け、動産文化財等を対象に、損壊建物から救出、安全な場所へ一時保管を行う文化財レスキュー事業が実施されている。本研究では、令和6年能登半島地震文化財レスキュー事業の日報を対象に計量的分析を行い、事業全体の傾向を可視化するとともに、今後の活動改善に向けた活用を目的とする。

1. はじめに

2024年1月1日に発生した石川県能登地方を震源とする地震により、能登半島の広域において多数の家屋倒壊が発生し、文化財にも甚大な被害が及んだ。この状況を受け、文化庁は2024年1月9日に「能登半島地震被災建造物復旧支援事業および被災文化財等救援事業」の実施を決定し、2025年4月時点で被災文化財救援事業（以下、文化財レスキュー事業という）が石川県で実施されているところである。文化財レスキュー事業とは、美術工芸品や古文書等を含む動産文化財等を対象に、損壊建物から救出、安全な場所へ一時保管を実施する事業である。2025年4月時点で約260件の救援依頼が寄せられ、約180件の救出を実施した。救援活動は、国立文化財機構、文化遺産防災ネットワーク推進会議参画団体（28団体）および石川県内の関係者を中心として、参加者を募り進められている。

2. 日報の運用と分析手法

参加者は活動の記録として、1日の活動終了後にWebフォームより日報を入力し提出する運用を行っている¹。過去の災害においては、平成23年東北地方太平洋沖地震の文化財レスキュー事業において日報の検討が行われた²。さらに日報の記述内容から、文化財の救援活動における作業概要を計量的に抽出する研究が行われた³。

本研究は村井ほか(2014)の分析手法を踏襲し、令和6年能登半島地震文化財レスキュー事業の日報に記載された作業内容を対象として、時系列に基づく計量的分析を実施する。各時期における

主要な作業内容の傾向を明らかにするとともに、平成23年東北地方太平洋沖地震の分析結果との差異を抽出し、文化財レスキュー事業の今後の活動改善に寄与する知見を得ることを目指す。

3. 分析対象項目

日報の記録項目として「作業テーマ」を分析対象とする。「作業テーマ」は選択式項目と自由記述式項目の2種類で構成される。

1) 選択式項目

「作業テーマ」は、作業内容を包括的に把握するための項目であり、以下の6種類から選択可能である。複数選択も許容されている。

- ・調査：文化財の被災状況を確認し、記録する。
- ・救出：被災した現場から文化財を取り出す。
- ・緊急保管場所への移動・搬入：緊急処置が必要な資料を、対応可能な設備へ搬入する。
- ・応急処置：資料に対し、応急的な処置を施す。
- ・一時保管場所への移動・搬入：資料を一時保管施設へ輸送・搬入する。
- ・その他：上記以外の作業。

補足が必要な場合や「その他」を選択した際には、自由記述式項目に詳細を記載し、作業内容の記録を行う。

2) 自由記述式項目

自由記述された文章に対し、MeCabを用いて形態素解析を行い、複数回出現する語彙の中から作業内容に関連するものを抽出した。その後、抽出した語彙を村井ほか(2014)の手順に準拠し、大カテゴリ、小カテゴリに分類することで整理を行った。各カテゴリの詳細については、表1に示す。

*みたに なおや（国立文化財機構文化財防災センター）

大カテゴリ	小カテゴリ	大カテゴリ	小カテゴリ
全体	全体	レスキュー	レスキュー
	駐在		梱包
	本部		積載
人員	移動		送付
	休憩		対象物
	参加		輸送
管理	防犯	処置	乾燥
準備	検収		除去
	資材		清浄
	準備		清掃
	調整		全体
	発注		保全
調査	確認	コミュニケーション	補修
	計測		会議
	調査		救援委員会
記録・整理	ストレージ		協力
	その他記録		検討
	撮影		指導
	整理		紹介
	台帳		情報交換

表1 作業カテゴリ

4. 分析結果

作業テーマの選択件数の月別推移を集計し、その結果を図1に示した。2024年2月から10月にかけて、「その他」の選択頻度が最も高い。2024年11月以降は「その他」は減少し、「救出」「一時保管場所への移動・搬入」が増加している。「その他」の詳細な内容は自由記述式項目から分析を行う。

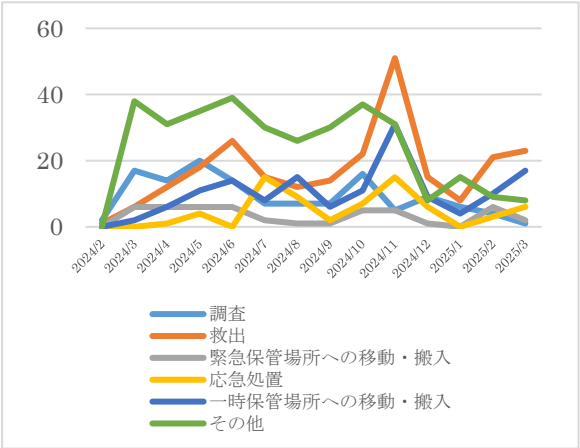


図1 作業テーマ月別集計（選択数）

自由記述式項目を大カテゴリごとに分類し、月

別に集計した結果を図2に示した。2024年3月から6月にかけて、「全体」に分類される語彙の出現頻度が高い。このカテゴリは、「現地本部」「引継ぎ」「マニュアル」など事業の運営に関わる語彙を含む。7月以降は救出に関わる語彙を含む「レスキュー」、一時保管場所での資料整理を示す「記録・整理」の出現頻度が高くなっている。

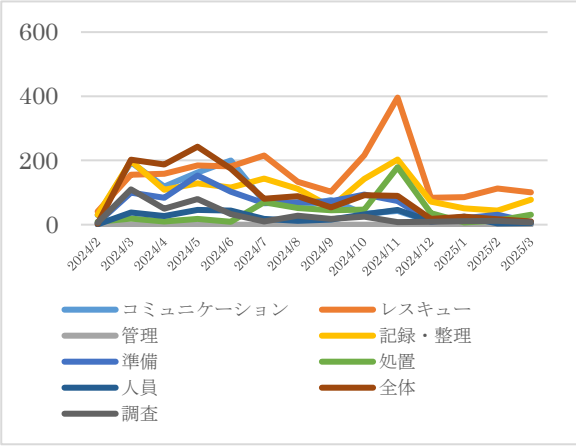


図2 作業カテゴリ月別集計（語彙出現回数）

5. 考察

これらの分析結果から、文化財レスキュー事業の初期段階においては、運営方針の決定や業務プロセスの整備に多くの労力が費やされることが確認された。事業の進展に伴い業務の枠組みが整理され、具体的な活動の実施が可能となることが明らかとなった。事業の初期段階における業務の明確化および体系化が、事業の円滑な運営において重要な要素であることが示唆される。

村井ほか（2014）の分析では、ほぼ全期間にわたって「処置」が活動の中心となっており、本研究における分析では異なる特徴が見られた。

今後の研究では、各災害における救援活動の特性を明確化するとともに、本研究の結果を踏まえ、文化財レスキュー事業の対応を体系化することが求められる。これにより、標準的な業務プロセスの事前設計を可能とし、災害発生時における迅速な対応を実現する体制の構築が期待される。

1 三谷直哉「令和6年能登半島地震文化財レスキュー事業における、日報システム構築の取り組み」、日本災害情報学会第29回学会大会, 2024年。
 2 二神葉子「4・作業日報のデータベース化と共有記録班の活動-」、『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業 平成24年度活動報告書』I-1 委員会事務局報告, 2013年, pp.40-41。
 3 村井源ほか「東日本大震災後の文化財救出活動記録の計量的分析」、『情報知識学会誌』Vol.24, No.2（2014年）, pp.238-245。

基礎自治体のデジタルアーカイブから MLA 連携の今後を考える

Proposing the future of Collaboration among MLA Specialists Based on the Digital Archives of Basic Municipality

毛塚 万里*
KEZUKA, Mari

Resume:

基礎自治体の公文書管理条例施行では、国とは異なる公文書館機能の事例が漸増中である。現用・半現用段階から専門的知見と責任をもって携わる知識・技能を習得した文書管理の専門家の増員と組織内配置が課題である。ちぢむ社会・災害に備えた知的資源・文化資源の保存・継承は、中長期計画への位置付け、MLA 等関係者、庁内理解者、議員、都道府県機関や外部有識者、市民等との共同が望まれる。

1. はじめに —『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』¹

- ・松山ひとみ氏「ミュージアム・アーカイブズ」
- ・黒澤美子氏「ドキュメンテーション」

2. 公文書管理条例と公文書館機能²

2.1 公文書管理法（平成 21 年法律第 66 号）

- ・公文書等＝国民共有の知的資源
- ・公文書等のライフサイクル³全体を包摂。現用文書・非現用文書の双方の公文書管理の一般法としての位置づけ⁴。
- ・情報公開法：現在の国民に対する説明責任
- ・公文書管理法：現在と将来の国民に対する説明責任をまっとうするための法律⁵

- 1) 特定歴史公文書等⁶の国民の利用請求権を明記
- 2) 地方公共団体への努力義務（条例制定）
- 3) 全府省統一ルールでの文書管理は実現。現用文書と非現用文書の管理が同一組織で地続きになることは実現していない[内閣府と独立行政法人国立公文書館（NA）]。
- 4) ライフサイクル概念と公文書館設置が基本
- 5) 寄贈・寄託による受入れの開始[NA 法の改正]
- 6) 文書管理の専門家「レコードマネージャー」「アーキビスト」への言及はない⁷
→専門家配置が前提のリテンション・スケジュール（レコードスケジュール）運用への懸念。文書作成時から専門家が関与する必要性が不明瞭⁸
- 7) アーキビスト認証制度の開始（2020 年～）
→「公文書館法」附則⁹は未撤廃

2.2 基礎自治体の公文書管理条例¹⁰

—公文書館機能の多様化

- 1) 利用者は「市民」限定も
- 2) 情報公開窓口での特定歴史公文書利用提供
- 3) 複合機能化による文書館機能の実現
 - ・山形県酒田市 酒田市文化資料館光丘文庫（企画部文化政策課/総務部総務課）¹¹
 - ・大阪府和泉市 和泉市いずみの国歴史館への文書館機能の設置（総務管財室/教育委員会生涯学習部文化遺産活用課）¹²
 - ・福島県郡山市 郡山市歴史情報博物館（総務部総務法務課/文化スポーツ観光部博物館）¹³
- 4) 自治体史編さん部門の位置づけ
- 5) 文書管理の専門家の組織内配置が進まない¹⁴
→電子決裁・文書管理システムへの対応が課題

3. 余計なお世話、心配無用？—されど「はて？」

- 1) a 自治体
- 2) b 自治体
- 3) 便利な NDL デジタルコレクション
- 4) 情報リテラシ？
 - ・文化財オープンデータ¹⁵
 - ・「利用」報告（中小規模所蔵者への配慮）
- 5) 学校資料？「卒アル」デジタル版
- 6) 新潟県小千谷市「おぢやの千の宝」市民との共創による記録の作成、保存・継承¹⁶

4. まとめ

4.1 A と ML 等、司書・学芸員・認証アーキビスト

*けづか まり（記録資料研究所／志度寺）、a 自治体住民

トやデジタルアーキビスト等の連携協力案

4.2 重点目標

- 1) 電子記録管理や保存の知識・技能の習得¹⁷
- 2) 日本版レコードマネージャーの実例蓄積

4.3 課題

- 1) 非正規専門職員の待遇改善¹⁸
- 2) 政策化：正規職員＋庁内理解者＋議員
- 3) 都道府県立関係機関との連携¹⁹
- 4) 教育機会の確保＝市民理解者増の戦略
- 5) 紙媒体で培われた文書管理経験の継承

- 6) 全史料協の組織・運営体制見直し
- 7) 国文学研究資料館アーカイブズ学研究分野
(アーカイブズ・カレッジ主催者) 廃絶の危機

謝辞：本発表は公文書管理条例勉強会（現代表：富田三紗子氏）参加者との学び、教材等研究 SIG(日本アーカイブズ学会認定 SIG，報告者が幹事)メンバーとの議論・助言等を得てまとめたものである。記して感謝申し上げます。

¹ 水谷長志編『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』樹村房，2023 年。

² 館（やかた）を設置できなくても、何らかの形で公文書館機能を果たすべきとの考え方。全史料協が 2011 年に公文書館機能自己点検・評価指標ミニマムモデル・ゴールドモデルを公表（『電子版 公文書館機能ガイドブック』2015 年，<https://www.jsai.jp/kanko/guidebook/index.html>，(Accessed 2025-05-05)）。

³ 坂口貴弘「ライフサイクル」『アーカイブズ学用語辞典』柏書房，2024 年，pp.404-405。

⁴ 宇賀克也『逐条解説 公文書等の管理に関する法律』第一法規，2009 年，p.1。

⁵ 早川和宏「公文書管理法」，註 3 前掲書，p.168。

⁶ 公文書管理法における「歴史公文書等」とは歴史資料として重要な公文書その他の文書。「特定歴史公文書」は歴史公文書等のうち国立公文書館等に移管されたもの、および法人その他の団体・個人から寄贈または寄託されたものをいう。なお札幌市や東京都豊島区の条例では「特定歴史公文書」を「特定重要公文書」とする。

⁷ 宇賀氏は註 4 前掲書でアーキビストを「歴史公文書等の専門家」とする。文書管理の専門家「レコードマネージャー」「アーキビスト」の典拠は「公文書管理の在り方等に関する有識者会議_最終報告」（2008 年 11 月 4 日），<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/koubun/hokoku.pdf>，(Accessed 2025-05-05)。

⁸ 『アーキビストの職務基準書』は国や地方公共団体において歴史公文書等の管理に携わる専門職を対象とした内容（同書 p.i）。現用段階では「公文書管理に関する助言及び実地調査」までがアーキビストの職務範囲とする。記録管理（レコードマネージャー）とアーカイブズ（アーキビスト）との二分法を廃し、文書管理水準の向上を推進する専門家としては位置づけられていない。

⁹ 「当分の間、地方公共団体が設置する公文書館には、第 4 条第 2 項の専門職員を置かないことができる」特例。

¹⁰ 条例制定の最新状況は、地方自治研究機構の「公文書管理に関する条例」が定期更新されており重宝。http://www.rilg.or.jp/htdocs/img/reiki/019_officialdocumentmanagement.htm，(Accessed 2025-05-05)。

¹¹ 「複合施設としてのアーカイブズ—酒田市文化資料館光丘文庫の開館と取組み—」『全史料協第 50 回全国（仙台）大会資料』pp.49-55。<https://jsai.jp/taikai/50/taikaisasshi50.pdf>，(Accessed 2025-05-05)。

¹² 2025 年 1 月 14 日開催の全史料協「2024 年度公文書館機能普及セミナー in 大阪」の報告資料などが参照できる。<https://jsai.jp/ibbs/b20241211.html>，(2024 年 12 月 11 日情報掲示板掲載) (Accessed 2025-05-05)。

¹³ 2022 年 7 月 5 日開催「令和 4 年度 第 1 回郡山市公文書等の管理に係る懇談会」資料 7 として公文書館機能、組織内連携、レコードマネージャー・アーキビスト（専門職員）配置に関する説明図がある。<https://www.city.koriyama.lg.jp/uploaded/attachment/46018.pdf>，64-65 コマ (Accessed 2025-05-05)。

¹⁴ 「座談会 地方自治体の公文書管理委員会を考える」『記録と史料』第 35 号（2025 年），pp.2-18。

¹⁵ 武内樹治・高田祐一「日本全国における文化財オープンデータの現状と課題」『デジタルアーカイブ学会誌』2022 年 6 巻 2 号，pp.e16-e20。https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsda/6/2/6_e16/article-char/ja/，(Accessed 2025-05-05)。本報告公表時における「文化財総覧 WebGIS」の内容が現在までに見直された点は評価したい。

¹⁶ 大橋正司〔ほか〕「図書館・博物館機能複合型文化施設における情報環境設計と共創型デジタルアーカイブ構築の試み」『JADS 第 17 回(2024 年度)秋季研究集会予稿集』（2024 年 12 月 1 日開催）(Accessed 2025-05-05)。

¹⁷ 具体策の一例として橋本陽「ライフサイクルから支えるデジタルシステム」註 13 前掲書，pp.39-42。

¹⁸ 菅真城「アーキビスト認証制度と専門職問題・非正規職員問題」『阪大法学』第 73 巻第 6 号（2024 年）。<https://doi.org/10.18910/94790>，pp.231-250。菅真城「MLA 専門職の非正規化と日本型雇用・公務員制度」『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第 21 号（2025 年），pp.21-41。<https://kokubunken.repo.nii.ac.jp/records/2000331>，(Accessed 2025-05-05) に詳しい。

¹⁹ 現在唯一の最良事例が「鳥取県災害時等の県立公文書館、図書館、博物館等の市町村との連携・協力実施計画」2017 年 9 月 5 日，<https://www.pref.tottori.lg.jp/269967.htm>，(Accessed 2025-05-05)。

ドキュメンテーションの可能性 —市井のコレクションがアートとミュージアムの概念を拡張する

Documentation Possibilities:
Common Collections Expand the Concept of Art and Museums

若月 憲夫*、杉浦 幸子**

WAKATSUKI Norio, SUGIURA Sachiko

Resume:

空き家活用の一環として、発表者（若月）は両親の遺品整理に取り組んだが、そこで取り入れたのがミュージアムにおける資料整理の方法論だった。その事が功を奏して、母の遺品が、発表者（杉浦）がデザインしたプロジェクト型授業「Micro Museum Market（3M）」の教育資源として採用された。ドキュメンテーションがきっかけとなって、新たなミュージアムの概念が萌芽することへとつながっていった過程を報告する。

1. 遺品整理の概要

2019年7月に母が翌年の4月に父が相次いで他界し、発表者（若月）の実家であり両親が亡くなるまで暮らした家屋¹は、空家となった。主なき後の家の片づけを兼ねて遺品整理を始めた。

手紙、本、文房具、調度品等、内容による区別はせず、明らかにゴミとわかるものは除いて、片端から箱詰した。一方で後に何処にあった遺品なのか判断できるように、整理場所の状態や箱毎の内容を記録したラベルを添付した。

実家における遺品整理の最大の課題は、父が遺した300点以上の油絵²である。それは故人の思いが籠った創作物であり、量的にはかさ張るが一定期間、保存する方針とした。

父は2015年に画集を自費出版したが、その時に撮影した67点の画像を使って作品の資料カードを作成した。さらに画像がない作品は写真撮影を行い、簡易な資料カードを作成して殆ど全ての作品のカード化を行った。また絵画には、作品番号を添付した。

空家の活用は、2階を遺品倉庫とし、1階を古いながらも広い事をウリに創作の場兼住居として美大生等に貸し出すつもりでいた。けれども息子家族がこの家に住む事を希望し計画は一変した。今のファミリーの感覚に合うように内装をリフォームするとともに、その工事の期間中は、全ての遺品を一旦、実家の外へ持ち出す必要が生じた。

絵画は、運送会社の倉庫に預けることとし、遺品の詰め込み作業が終了した整理箱（定型208箱、大型不定形34箱）を外部³に運びだし、そこで分量を1/10程度にすることを目標に、整理・圧縮作業を開始した。写真や書類などの記録資料や父母の創作活動に関わる資料⁴を中心に残すという基準で選んだ品々には、もとあった場所が容易にたどれるように箱の番号を記した。

2. 廃棄品の有効活用の検討

リフォームに際しては、一部屋だけを改装せず、遺品倉庫として使用することとした。そのため、整理圧縮した記録資料や運送会社に預けた絵画、スペースをとらない巻物状態の書や宝飾品等は、リフォーム後に倉庫となった部屋に戻すことができた。けれども、それ以外の衣類や食器類、調度品等の品々を保管する場所がなく、博物館等への寄贈を含め、少しでも多くの物を有効活用していく方策を検討した。

中でも母が生前に使用していた衣類は、昭和レトロブームの中で若い女性層の嗜好にあう可能性を持っていた。学園祭のフリー・マーケットをイメージし、受入先を探していたところ、武蔵野美術大学芸術文化学科でミュゼオロジーと生涯学習を教えている発表者（杉浦）にたどり着いた。

3. 極小博物館（Micro Museum）という発想

運び込まれた遺品を見て、杉浦は、一生をかけてモノを集める人間を極小博物館（Micro Museum）、その人の価値観や人格を反映した遺品

*わかつき のりお（茨城大学）、**すぎうら さちこ（武蔵野美術大学）

を Micro Museum のコレクションと捉え、博物館法で規定された従来のミュージアムだけではなく、一人の人間もミュージアムそのものであるという新しい概念を立ち上げた。

ここから、洋服、和服などの衣類に加え、故人が身に着けていた宝飾品や小物類、趣味としていた書関係の品々、さらに主婦として管理していた食器類など、全ての品々が極小博物館 (Micro Museum) のコレクション群となった。

4. プロジェクト型授業での教育的活用

この発想を元に、杉浦は、芸術文化学科 3 年次選択必修授業として、故人が大切にしてきた品々を次の持ち主へとつなぎ、新たな命を吹き込むメディアとしてのフリー・マーケットとワークショップを行う「Micro Museum Market (3M)」⁵というプロジェクトをデザインした。

受講した 24 名は、授業の最初期に、若月によるレクチャーを受け、今回扱うモノが貴重なコレクションであることを学んだ。その後、5 チーム⁶に分かれ、コンペで選ばれたテーマ「Reborn」の下、フリー・マーケットでは、遺品を次の持ち主へ引き継ぎ、社会に還元・循環させることをめざし、遺品の値付け、フリー・マーケットに関わる各種デザイン (空間、パッケージ、値札、什器など) を行った。またプロジェクトの主旨に合う寄付先の選定も行なった。ワークショップでは、遺品を生まれ変わらせ、多くの人びとにつなぐことをコンセプトに、遺品の風呂敷や手ぬぐい等を素材に、誰でも参加でき、気軽に作れ、身に付けられるオリジナルな缶バッチを制作した。

フリー・マーケットとワークショップは、武蔵国分寺跡資料館⁷、と、武蔵野美術大学のオープンキャンパス⁸の 2 カ所で実施した。圏域のミュー

ジウムと連携し、博学連携による地域活性化の一翼を担うとともに、大学のオープンキャンパスで実施することで、芸術文化の新たな担い手となる高校生や保護者、地域子どもたちなどに新たな出会いと学びの場を創出した。

計 4 日間で 275 の遺品が人々の手に渡り、約 200,000 円の売上げを 9 カ所に寄付した。オープンキャンパスで実施したアンケート (回答数 158) では、88%が 3M プロジェクトを評価し、89%が今後も継続した方が良いという結果が出た。

5. 考察

個人資料や家資料などの整理はミュージアムにおける調査研究のひとつであるが、個人が行う遺品整理もこれと類似する側面を持っている。モノと直接対峙することで収蔵場所の問題やトリアージなど、ミュージアムが抱える諸課題と同一の問題にも直面する。

その中で重要なのは、モノに対する心根である。遺品には、いわゆる市場価値のある物は少ないが、その一つひとつが故人の生きた証である。今回生まれた極小博物館 (Micro Museum) という概念は、改めてそれに気がつくきっかけとなった。

そして、この一連の展開は、ドキュメンテーションという行為の先にアートやミュージアムの新しい概念が生まれることを物語っている。来歴情報の整理を裏づけとした信頼性があったことから、母の遺品が教育資源として採用され、故人の所蔵品を次の持ち主へとつなぐ授業が生まれた。この取り組みは 21 世紀のミュージアムのあり方に一石を投じるものである。こうした未知の広がりの可能性を思い描く事も、ドキュメンテーションに携わるひとつの醍醐味と云えよう。

¹ 1969 年築、木造 2 階建て 4LDK 78.9 m²。所在地は練馬区桜台。

² 父が生前に日曜画家として書いたもので F100 号、F80 号、F50 号、P50 号等の大型絵画もある。

³ 解体直前の古屋を期間限定で借用。かつては「Rusu」という名称でギャラリーとして使われていた。

⁴ 父は油絵だが、母は書を趣味とし師範も務めていた。その関係の資料が多く残されていた。

⁵ フリー・マーケットを行う事から Micro Museum に Market を加えて Micro Museum Market 略して 3M とした。

⁶ AA 班 (管理・経理・総務)、FM 班 (フリマ)、PD 班 (記録)、PR 班 (広報)、WS 班 (ワークショップ)

⁷ 2024 年 6 月 22 日 (土) 12:00-16:00、23 日 (日) 10:00-15:30 実施

⁸ 2024 年 7 月 13 日 (土) 14 日 (日) 両日とも 10:00-16:00 実施

スポーツ雑誌記事への効果的なアクセス作成の手法 ——『アサヒ・スポーツ』を事例に

Methods for Creating Effective Access to Sports Magazine Articles:
“Asahi Sports” as a Case Study

赤間 亮*、村上 佳奈子**、新名 佐知子**

AKAMA Ryo, MURAKAMI Kanako, NIINA Sachiko

Resume:

『アサヒ・スポーツ』は、1923年（大正12）3月から1956年（昭和31）まで、931号まで続いた雑誌であり、戦前戦後にわたる日本のスポーツの歩みが記録されている。スポーツを総合的に扱った本誌の価値は高く、多数の掲載写真も含めてスポーツアーカイブの最重要資料の一つである。本発表では、大量の雑誌記事索引、画像検索を可能にした作業手法と、その成果の有効性について報告する。

1. 『アサヒ・スポーツ』について

『アサヒ・スポーツ』は、大正から昭和にかけて、朝日新聞社により発刊された総合スポーツ雑誌である。あらゆる競技、選手の紹介や、スポーツ界の批評、オリンピック大会のレポートなどが豊富な写真とともに掲載されており、「みる雑誌」としての役割が大きい。また、大正期に本雑誌が発行されたことで、日本で「スポーツ」の概念が普及し始めるきっかけとなったと言われている。さらに、朝日新聞社が社会部から運動部を独立させたのと同時に発刊された雑誌であることから、スポーツに関する専門的で幅広い取材により記事が構成されており¹、現在からみてもスポーツ史やスポーツ文化の研究上で史料価値が高いと評されている。

『アサヒ・スポーツ』は、大正12年3月に、B4版で月2回の発行から始まった。昭和18年6月発行の通巻第549号以後、戦局悪化のために廃刊となる。しかし、戦後早い時期に復刊され、昭和23年1月に550号がタブロイド判で出版された。以来、世の中が復興し落ち着いてくると、発刊当時のB4版の雑誌の体裁に戻り、グラビア写真も多数掲載されるようになったが、昭和31年1月の通巻第931号を最後に休刊した。

秩父宮記念スポーツ博物館では、図書資料としてまとめた通巻を蔵書しているが、とくに戦前戦後に出版された巻号は紙質が劣悪であり、かつ閲覧や複写の請求が多数ある資料である。また、当館では受入時のありのままの状態に保存し、通

巻を揃えて合冊製本していない。そのため出納の手間がかかることも多い。

これらの課題を解決するため、当館では立命館大学アート・リサーチセンター（ARC）との共同研究として、『アサヒ・スポーツ』のデジタル化と、画像データによる資料管理や、調査研究に資する将来的な活用方法を検証した。（新名）

2. 掲載記事・写真データの構築と閲覧システム

2.1 掲載記事データと掲載写真切り抜き

本プロジェクトでは、立命館大学ARCが独自開発で運用している「近代書籍閲覧システム」に『アサヒ・スポーツ』の各号を登録して作業を行った。「近代書籍閲覧システム」には、ARCのデータベース群専用開発されたページ単位でアノテーションを付与する「User Memo」や、ページ画像の一部の領域に対してアノテーションを付与できる「Image Note」というツールを使うことができる。

1) 「User Memo」を使った記事タイトルの抽出

このツールでは、キーワードなどの単純な単語やテキストを自分が閲覧しているページに対して高速に付与できる。ページ閲覧時に「User Memo」を開くと、カーソルはキーワード欄でそのままアクティブになるので、そのままタイピングし、Enterキーで保存される。同じページ内では、キーワードの連続入力も可能である。元記事のページに付属するメタ情報は、ユーザーが意識することなく自動的に保存される。

*あかま りょう（立命館大学アート・リサーチセンター）

**むらかみ かなこ、にいな さちこ（秩父宮記念スポーツ博物館）

「User Momo」には、キーワード以外にもプロジェクト型で内容を定義して作業をできる複数の項目があり、本プロジェクトでは、スポーツ記事の特性を踏まえて、競技名を付与した。

2) 「Image Note」を使った画像の切り抜き

『アサヒ・スポーツ』には、多くの写真が掲載されており貴重である。写真1枚毎に切り抜き、コンテンツ化することで掲載写真をより効果的に活用できる。「Image Note」は「User Memo」システムに付属する画像切り取りシステムであり、これも高速で作業できるのが特徴である。写真のキャプションやその他のメタデータは、「Use Memo」と同一である。

2.2 記事閲覧と写真閲覧システム

記事の閲覧と写真画像の閲覧システムとは、二次利用の可能性という面で性格が異なる。そのため、それぞれ別システムで閲覧することにした。

1) 個別記事閲覧システム

「User Memo」で蓄積された各号個別記事については、『アサヒ・スポーツ』の閲覧システムに各号の孫データとして登録している。各号（子書誌）に「孫書誌あり」の表示ボタンを加えることで、記事単位での詳細な閲覧が可能である。各号の目次を確認しながら閲覧する感覚である。

一方で、孫書誌を検索対象とする閲覧インターフェイス『アサヒ・スポーツ記事検索システム』を用意することで、記事タイトルや記事署名者、競技カテゴリーから直接検索して、その記事ページに到達できる。

2) 掲載写真閲覧システム

掲載写真（囲み広告なども含む）については、直接その写真を一枚単位で二次利用するために、資料の部分画像などを蓄積できる「マイクロコンテンツ」閲覧システムに取り込んだ。二次利用の事例としては、一人の競技者に焦点を当てて、複数の写真から、その競技者だけの部分的な集積（つまり再度のコンテンツ化）や、AIによる場所の特定、被写体の顔貌による個人名特定などが考

えられるだろう。本DBシステムも、近々IIIF対応の予定であり、外部システムからのさらなる工夫を凝らした利活用を促すこともできる。（赤間）

3. 写真閲覧システムの利用可能性

写真閲覧システムを利用して、『アサヒ・スポーツ』に掲載された図像とキャプションのテキストをどのように分析することができるのかについて、いくつかの事例を挙げる。

まず、個人として写真が紹介されている女性アスリートについての考察である。女子選手は「苗字」＋「嬢」の形で記載されることが多いため、「嬢」で検索し、写真掲載回数の多い選手を特定した。その上で頻出の選手の氏名で検索すると、当時当該選手がどのようにまなざされていたのか、その片鱗を掴むことができる。

次に、スポーツを通した天皇・皇族表象の考察である。「陛下」「殿下」等の語句で検索すると、スポーツに関わる天皇や皇族の図像を多数確認でき、『アサヒ・スポーツ』の刊行された戦前・戦中・戦後の通時的な天皇・皇族表象を分析することが可能である。これを概観していくと、スポーツ以外の内容も広く扱った画報誌における皇族表象を検討した先行論²で指摘されているように、『アサヒ・スポーツ』においても、皇族が各種スポーツの視察を行う姿は「スポーツの振興者かつ総攬者としての在り様を示」し、一方で自身もスポーツに取り組む姿は親しみやすい「平民性」を感じさせ、二つの異なった側面を提示している。

以上のように、写真検索システムを用いてさまざまな研究、考察を行うことが可能であるが、現状のシステムでは、例えばキャプションに選手の苗字しか含まれていない場合は検索が難しいことがある等、キーワードの設定が完全ではない。キーワードの拡充により検索性を向上させることを今後の課題としたい。（村上）

¹ 木下秀明『日本体育史研究序説』不昧堂、1974年、pp. 258-259.

² 茂木謙之介「戦前戦中戦後グラフ雑誌における皇族表象－『アサヒグラフ』の検討から－」、『リテラシー史研究』第8巻（2015年1月）、pp. 1-15.

<https://waseda.repo.nii.ac.jp/records/10998>, (Accessed 2024-05-12).

アートプラットフォームジャパンにみる情報連携と対外発信をめぐる課題

Challenges in Information Aggregation and International Dissemination The Case of Art Platform Japan

川口 雅子*、谷口 英理*、石黒 礼子*、手銭 和加子**

KAWAGUCHI Masako, TANIGUCHI Eri, ISHIGURO Reiko, TEZEN Wakako

Resume:

国立アトリサーチセンターが運営する「アートプラットフォームジャパン」は、日本のアートに関する総合的なリサーチポータルの実現を目指すものである。本発表は、その取り組みの過程で浮かび上がってきた対外発信およびデータ統合に関する課題を共有することを目的とする。2024年に本公開された「日本アーティスト事典」では、英訳の過程などで、専門用語や人名の用い方に見直しを迫られる場面があり、客観性を備えた情報編集の必要性が浮き彫りとなっている。全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」では、収蔵品のナンバリングなどをめぐる課題が顕在化し、データ管理の基礎知識を博物館現場に普及・定着させることの重要性が再確認された。これらはいずれも、組織横断的なデータ共有・公開の枠組みであるからこそ表面化した課題といえよう。

1. はじめに

国立アトリサーチセンターが運営する「アートプラットフォームジャパン」(APJ)は、日本のアートに関する総合的なリサーチポータルの実現を目指すものである。本発表は、その取り組みの過程で浮かび上がってきた対外発信とデータ統合に関する課題の共有を目的とする¹⁾。

APJについては、国立アトリサーチセンター発足直後の2023年、本学会第34回年次大会にて概要を紹介した²⁾。当時構想段階にあった「日本アーティスト事典」(DAJ)はその後本公開され、一部の作家に関する解説・レファレンス情報の日英二言語発信も始まった。また全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」は、収録範囲を日本近現代美術から国内外の近現代美術全体に拡大し、収録件数はこの2年間で約2.8倍増加した。

2. 日本アーティスト事典

2.1 なぜ「日本アーティスト事典」か

日本の近現代アートという領域は、美術史の中でも主流からは外れた位置にあり、エリア・スタディーズでも東アジアの中の日本というきわめて限定的な文脈に置かれている。このような状況下、日本の近現代アートがより広い文脈の中で適切な位置づけを獲得し続けるためには、どのような情報基盤が求められているだろうか。

美術史という学問の発祥地である欧米には、研究に不可欠な基本ツールとしてアーティスト事典がある。なかでも20世紀初頭からの伝統を持つ、それぞれ「ティーム・ベッカー」「ベネジット」として名高い二大人名事典は、現在ではいずれもオンライン版として継承され、引き続き利用されている³⁾。注目すべきは、それらが単に人名や生没年、生没地、解説文にとどまらず、主要展覧会、主要収蔵先、参考文献など、調査に資する包括的な情報を収録している点である。この点にこそ、両事典の研究ツールとしての有用性がある。

これらの先事例を手本として、日本のアーティストに関する調査研究に資するため、「日本アーティスト事典」を構築した。

2.2 情報を編集することの重要性

これまでに組織内外の70名を超えるキュレーターら専門家のご協力を得て、アーティスト103名について解説文およびレファレンス情報を掲載することができた。この場を借りて、執筆者の皆様にご心より感謝申し上げたい。

APJは日本近現代アートの研究支援を目的としつつ、その利用者層として、日本近現代美術史研究者に限らず、国際的に活躍するキュレーターや美術史家、アート関係者、学生、そしてアートに関心を持つ広範な一般層を想定している。こうした多様な読者層を前提とする場合、「美校騒動」

*かわぐち まさこ、たにぐち えり、いしぐろ れいこ (国立アトリサーチセンター)

**てぜん わかこ (株式会社 TEZEN)

「松田改組」「町田久成」といった専門用語や人名は、特定の学術コミュニティの内部では通用しても、共通認識を前提としない読者には何らかの補足が必要となるだろう。しかし元原稿には、これらの「ジャーゴン」が注釈なく登場する例が少なからず見受けられた。また、海外での活動などに関して裏付けが十分でない箇所もあり、英訳の過程でそれが露呈するケースもあった。

美術館という場では多様な利用者への配慮から、情報はとかく平易化・平板化に流れやすい。しかし目的がリサーチ支援にある以上、難解な用語を避けることでは解決しない。もっとも、原文の内輪的な傾向も改善の余地はあるだろう。したがって問題は、原文が持つ専門性・学術性を損なうことなく、いかに俯瞰的視点を持ち、分野外の読者にも開かれたものにするか、である。この意味で、客観性・中立性を備えた情報編集力⁴、そして分野横断的な読者を想定するバランス感覚が求められているのではないか。

3. 全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」

3.1 これまでの成果と反響

全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」は文化庁アートプラットフォーム事業から継承されたデータベースであり、国立アトリサーチセンターがこれを引き継いでから3年、データベース自体としては5年目を迎える。

現在、協力館は212館に達し、各館から提供された情報をもとに公開される収蔵品データは44万3千件を超えるまでになった。文化遺産オンラインと比較すると、協力館数や画像数では及ばな

いものの、作品公開件数に関しては文化遺産オンラインの約29万3千件を上回る規模に達した。協力館からは「これまで作品紹介の機会は限られていたが、SHŪZŌを通じてインターネットで公開することができた」「他館学芸員の目にとまり、展覧会への貸出につながるなど、収蔵品の活用に結びついた」といった反響も寄せられている。

3.2 データ管理に関する基礎知識の普及・定着の必要性

SHŪZŌでは、各館から提供されたデータを尊重し、原則として表記の統一は行っていない。また複数機関の情報を集約するアグリゲーターとして、常に最新状態を維持することよりも、出典と日付を明示することでデータの信頼性を担保する方針を採っている。

とはいえ、様々な事情や理由から館ごとのデータ一括更新の必要が生じる場合はある。その対応の過程で、収蔵品に付与される作品番号（ナンバリング）などに関する課題が顕在化している。このことは、博物館の現場にデータ管理に関する基礎知識をさらに普及・定着していくことの必要性を示唆していると言える。

4. 終わりに

ここに述べた内容は、あくまで基本的な事柄に過ぎないだろう。しかしアートプラットフォームジャパンのように、単館にとどまらず組織横断的なデータ共有・公開の枠組みであるからこそ、課題として一層浮き彫りになったとも言える。本学会において本件を共有することが、今後の課題解決に向けた一助となれば幸いである。

¹ アートプラットフォームジャパンは本発表者のほか、国立アトリサーチセンター情報資源グループの秋田奈美、藤代知子、藤井糸子、青木識至、小林剛、上原麻美子、および楠まゆこ、岡俊一郎の各氏によりデータ更新・管理運営が行われている。

² 拙稿「動向紹介2 国立アトリサーチセンター：情報資源グループの活動概要」、アート・ドキュメンテーション学会第34回（2023）年次大会、2023年6月18日。このほか以下記事と内容が一部重複していることをご容赦いただきたい。拙稿、国立アトリサーチセンター設立とその情報資源部門の取組、カレントアウェアネス-E, no. 459, 2023-06-29, <https://current.ndl.go.jp/e2606>; 拙稿, North American Coordinating Council on Japanese Library Resources. “Japanese Studies Spotlight: Art Platform Japan: Fostering the Development of Research on Japanese Art.” Posted February 21, 2025, <https://guides.nccjapan.org/homepage/news/news/Japanese-Studies-Spotlight-Art-Platform-Japan>

³ ティーム・ベッカーはArtists of the World online. Berlin, Walter de Gruyter, <https://aow.degruyter.com/>に、ベネジットはBenezit Dictionary of Artists. Oxford, Oxford University Press, <https://www.oxfordartonline.com/benezit/>, (Accessed 2025-05-01)にそれぞれ受け継がれている。

⁴ 編集に際し、和田綾乃氏（株式会社コギト）の協力をいただいている。

【ポスターセッション】

6月15日(日) 15:00 - 15:40

オランダの Society for Japanese Art アーカイブズについて

堀 咲子

(筑波大学大学院 人間総合科学学術院人間総合科学研究群芸術学学位プログラム博士後期課程、
独立行政法人日本学術振興会 特別研究員 (DC2))

オランダにおいて日本美術を専門に扱う研究組織である現 Society for Japanese Art (SJA) は、1937年に日本版画工芸美術協会 (Vereeniging voor Japansche Grafiek en Kleinkunst) として創設された。同会は当初より組織としての事務所や倉庫は存在せず、戦前から現在に至る膨大なアーカイブズは、現在、シーボルトハウスの厚意により同館の屋根裏に保管されている。

発表者はここ数年にわたって1930～1950年代のオランダにおける日本美術受容をテーマとした研究を続けており、日本人で初めて SJA アーカイブズ調査の許諾を得た。2021年8月および2025年3月に調査を行った結果、創立から1950年代までの主要なアーカイブを概観することができた。ここには既に消滅した組織の資料も含まれており、他では閲覧不可能な貴重なものも存在する。

SJA アーカイブズは、美術史のみならず、第二次大戦当時の政治史、国際関係の研究にも重要な資料となることが考えられるが、一般にはその存在すら知られていない。これらのデータを研究者間で共有する方法について模索していきたい。

平沢「光彩」の仕事——光の差さない画室から生まれた「コレクション」を辿って

矢部 恵子

(国立歴史民俗博物館)

筆者は昨年6月の当学会年次大会に於いて、「平沢貞通——4つの雅号をもつ画家の矜持」のタイトルで研究発表の機会をいただいた。平沢は戦後僅か3年の1948年、56歳にしてテンペラ画会会長・帝展無鑑査の座から突如、囲圍の人となって中央画壇からの離脱と改号を余儀なくされた。調査の結果、画家の没後、現存する作品の多くが「個人蔵」のコレクションであることを明らかにした。

本発表は、昨年の発表後にいただいた質問（1、戦前に描かれた作品の現存について 2、よく観て描く、すなわち、「観照」の叶わない環境下での制作について）とご示唆（獄中期の雅号「光彩」の作品を展示するミュージアムの情報）を基に調査を進める中で明らかになった事実の報告と共に、ややもすれば「獄中画」と一括りにされがちな「光彩」時代の資料に光を充てる。

「光彩」の時代は生来、画家が得意とした「地平線」を軸に、「静物画」、「人物画」、「富士山」、80代になると「仏画」にも挑んでいる。光の差さない画室から生まれた数多の「コレクション」と対峙し現存する資料の公開を通じて、画家95歳の生涯で最長となった雅号「光彩」の仕事の再評価をめざす。

堀 咲子 (ほり さきこ)

戦間期欧州における日本美術受容をテーマに、博士論文のためオランダとドイツをフィールドに調査を続けている。単著論文に「美術商ティコティンの戦前・戦中オランダ期にみる活動 — 展覧会への出展記録と日本美術協会との関わりを中心に —」『美術史』第192冊 (美術史学会) 2022年3月、Berend Modderman: A Benefactor of Japanese Art., in: Andon, No. 114 (Society for Japanese Art) Leiden December 2022 など。

矢部 恵子 (やべ けいこ)

国立歴史民俗博物館 技術補佐員 (非常勤職員)
2024年12月より現職、館内資料の保全に従事。2025年3月京都芸術大学大学院芸術研究科芸術専攻博士後期課程単位修得満期退学。専攻：美術史 (近代)。2022年在学中、「平沢貞通生誕130年・没後35年記念絵画展 — 『不朽』『三味二』『大障』『光彩』 — 画家・平沢貞通の生涯 —」開催。現在も個人所蔵者の資料調査を通じて、コレクション存続・アーカイブ・画家の再評価に臨む。

【ポスターセッション】

東京都江戸東京博物館の収蔵品管理システム——図書資料との一元管理を中心に

楯石もも子、鳥越千尋
(東京都江戸東京博物館)

東京都江戸東京博物館では、1993年の開館に先立ち IBM DB2 を基盤に独自開発した収蔵品管理データベース「江戸東京博物館資料情報システム」の運用を開始した。開館時より収蔵資料一点ごとにバーコードを付与し、収集、登録、展示・貸出・修復等の履歴管理、棚卸し、公開・検索まで、博物館資料に関わる業務全般を統合的に管理している。特徴に、図書資料を博物館資料の一部として同じプラットフォーム上で扱っている点が挙げられる。

当初は OS/2 上で稼働し、2008年に Windows OS へ移行、2020年にはパッケージシステム「Artize」へのリプレースを行った。更改に際し、既存機能を継承しつつ業務フローの見直しとシステム改善・新規開発を実施、従来の課題であった書誌作成・管理面での強化を図った。

博物館資料と同一システムで管理することで、展示・貸出といった博物館業務に対する図書資料のシームレスな運用や、活用履歴・収蔵資料掲載情報付与などの連携が容易になり、単なる書誌情報にとどまらない博物館図書室ならではの文献情報の蓄積が進んでいる。本発表では、この一元管理の具体例とその効果、課題を報告する。

楯石 もも子 (たていし ももこ)

東京都江戸東京博物館司書。図書館情報大学卒業後より現職に就く。昭和女子大学大学院修了。国立公文書館認証アーキビスト。専門は図書館情報学、博物館ドキュメンテーション、アーカイブズ。本務のほか、アート・ドキュメンテーション学会美術館図書室 SIG (ミュージアムライブラリーの会) 代表、専門図書館協議会研修委員、東京造形大学非常勤講師 (博物館情報・メディア論)、書籍修復家・岡本幸治氏のアシスタントに従事。

鳥越 千尋 (とりごえ ちひろ)

東京都江戸東京博物館司書。首都大学東京 (現・東京都立大学) 都市教養学部理工学系卒業。2019年から現職に就き、主にシステム改修・管理や購入雑誌の収集業務を担当。2022年にシステム改修の経緯をまとめた事例報告を執筆 (「【事業報告】江戸東京博物館における収蔵品管理システム更改の事例報告——図書資料管理の立場から」『東京都江戸東京博物館紀要』第12号)。ほかに三菱一号館美術館の図書整理業務を兼務。

博物館活動における情報・メディア論の位置付けについて

阿児雄之 (東京国立博物館)、北岡タマ子 (人間文化研究機構)、田良島哲 (東京文化財研究所)、福島幸宏 (慶應義塾大学)、本間友 (慶應義塾大学)、山内利秋 (九州医療科学大学)

発表者らは、新たな講義テキスト『ミュージアムの未来をつくる 博物館情報・メディア論』(美学出版、2025) の制作に取り組み、これを刊行した。本書の内容構成を構想する過程は、学芸員養成課程における「博物館情報・メディア論」の位置づけを再検討することから始まった。さらに、今日の社会状況に応じた博物館活動そのものにおける「博物館情報・メディア論」の在り方を考えることが重要であると認識するに至った。

その結果、博物館における活動・機能を8つに区分し、それぞれの活動・機能に関わる情報・メディアの意義とその役割を複数のトピック (例: 知的財産マネジメント、ドキュメンテーション、社会教育との接続など) から解説する構成とした。これを視覚的に整理したものが「博物館活動のサークルチャート」である。サークルチャートは、「博物館情報・メディア論」2単位に相当する講義内では網羅しきれない広範な内容を含むが、学芸員にだけでなく、博物館活動を担う多様な人材が「博物館情報・メディア論」を通じ学ぶ要素を包括したものとなっている。

阿児 雄之 (あこ たかゆき)

東京国立博物館 情報管理室長、館史資料室長／文化財活用センター デジタル資源担当室長
東京工業大学大学院修了。博士 (学術)。東京工業大学博物館講師などを経て、2018年10月から現職。専門は博物館情報学、文化財科学。主な著作に『ミュージアムの未来をつくる 博物館情報・メディア論』(美学出版、2025)、「東京国立博物館における情報連携事例から見るミュージアム情報の流通」『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』(樹村房、2023) 他。

【活動紹介】

6月15日（日）15:40 - 15:50

アート・ドキュメンテーション学会の活動に関連の深い機関や団体について、活動の紹介（活動や特徴・機関のニュース・事業紹介等）をしていただくセッションです。

奈良国立博物館のポスター収集の 試み

奈良国立博物館 仏教美術資料研究センター
（奈良県奈良市登大路町 50）

<https://www.narahaku.go.jp/about/guide/center/>

奈良国立博物館は1895年に開館し、2025年に開館130年を迎える。当発表では当館が開催した展覧会ポスターの収集とデジタル化の試みについて紹介する。1983年頃よりポスターのフィルム撮影を開始し、現在「画像データベース」にてご覧いただくことが可能である。歴代ポスターを集めた特別企画として、2014年「正倉院展ポスター昭和22～63年」、2019年「正倉院展ポスター平成をふりかえる」をきっかけに、現物の収集・保管がはじまった。2024年にはポスターをデジタル撮影後に当センターにて現物を保管する取り組みをはじめ、現在は館内各所にて過去のポスターを探索・収集している。今後は収集したポスターを活用いただけるように整理・保管を目指している。

大内 静華（おおうち しずか）

奈良大学文学部文化財学科卒業。立命館大学衣笠図書館業務委託職員、京都ノートルダム女子大学図書館情報センター事務職員（司書）、東北大学附属図書館工学分館事務補佐員などを経て、2023年4月より現職。図書担当のアソシエイトフェローとして司書職に従事。文献資料の収集や閲覧・レファレンスなど、奈良国立博物館 仏教美術資料研究センターにおける幅広い業務を担当している。NPO 法人書物の歴史と保存修復に関する研究会会員。

コレクション SIG、発足！

コレクション SIG
（アート・ドキュメンテーション学会）

コレクション SIG メーリングリスト申込ページ
<https://forms.gle/G9w9BjYxwhUaxAq8A>

コレクション情報の管理や利活用について興味・関心があるメンバーが集い、交流しながら学び合える場をめざして、2025年4月「コレクション SIG」が新たに発足しました。

本 SIG では、ミュージアムの DX を見据えたデジタル基盤として必要不可欠なコレクションのデジタル情報管理に関わる諸課題はもとより、その前提となるドキュメンテーション理論やデジタル化されたコレクション情報の利活用にも幅広く取り組んでいきたいと考えています。

まずは等身大で出来るところからスタートということで、メーリングリストを立ち上げました。JADS の会員・非会員を問わず参加可能です。このメーリングリストでの活動を軸に、オンラインを中心に研究会や勉強会、見学会、情報交換会などの企画を実施していく予定です。参加者の声を反映しながら、顔の見える活動を目指しています。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

コレクション SIG（アート・ドキュメンテーション学会）

2025年2月設立承認、4月活動開始。代表：鴨木年泰（東京富士美術館）。

メーリングリストでの情報共有・交流をベースに、コレクション管理の現場の事例共有から、理論・学術的研究までの幅広いレンジで勉強会やイベントの開催を計画。コレクション情報のマネジメントに関わる人材拠点として、広く美術館・博物館の発展にも貢献することを目指しています。

コレクション SIG お問い合わせ先
jadscollection@gmail.com

『アート・ドキュメンテーション研究』第34号

原稿募集

『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会では、第34号（2026年5月刊行予定）に掲載する原稿を募集しています。

研究論文は査読対象となりますが、その他に研究ノート、事例報告、資料紹介、書評なども歓迎いたします。詳しくはJADSウェブサイトの投稿規定をご覧ください。

投稿をお考えの方は、原稿の仮題と概要（400字程度）、および原稿種別（投稿規定3.を参照）を、エントリー期限までに、編集委員会宛にご連絡ください。

エントリーを行いました方には、原稿執筆用のテンプレートをお送りしますので、これに沿ってのご執筆をお願いいたします。

JADS会員の皆様からの、ふるってのご投稿をお待ちいたしております。

エントリー期限：2025年9月30日

原稿提出期限：2025年12月15日

査読・編集：2025年12月～2026年5月

投稿規定・執筆要領の掲載先：<http://www.jads.org/pub/pub.html>

連絡先：『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会

kenyu_editor@jads.org

アート・ドキュメンテーション学会

刊行物販売のお知らせ

2025/6

本学会刊行物をご購入いただけます。お申し込みは毎日学術フォーラムまで（別途送料がかかります）。

◆刊行物バックナンバー

『アート・ドキュメンテーション研究』 第32号	(2024年5月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第31号	(2023年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第30号	(2022年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第29号	(2021年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第27・28号	(2020年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第26号	(2019年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第25号	(2018年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第24号	(2017年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第23号	(2016年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第22号	(2015年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第21号	(2014年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第20号	(2013年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第19号	(2012年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第18号	(2011年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第17号	(2010年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第16号	(2009年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第15号	(2008年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第14号	(2007年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第13号	(2006年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第12号	(2005年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第11号	(2004年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第10号	品切	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第9号	(2001年7月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第8号	(2000年7月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第7号	(1999年9月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第6号	(1997年8月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 (税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第5号	(1996年8月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 (税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第4号	(1995年8月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 (税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第1～3号	品切	
『国際シンポジウム：東アジアにおける美術・文化財情報のネットワーク化を考える：報告書』		
	(2005年1月刊)	定価¥1,000 (税込)
『arsの現場とツールの諸相Ⅱ』(ars-WG 叢書・2)		
	(2000年3月刊)	定価¥1,000 (税込)
『報告書：シンポジウム：フランスにおける美術情報の普及と専門教育』		
	(1998年3月刊)	定価¥1,500+税
『美術情報と図書館：報告書』		
	(1995年3月刊)	定価¥2,500 (税込)

◆お問合せ・お申し込み

株式会社 毎日学術フォーラム

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル

Tel : 03-6636-0956 (販売直通) Fax : 03-6267-4555 E-mail: maf-sales@mynavi.jp

お申し込み方法 : <https://maf.mynavi.jp/sales/>

■アート・ドキュメンテーション学会とは

アート・ドキュメンテーション学会は、ひろく芸術一般に関する資料を記録・管理・情報化する方法論の研究と、その実践的運用の追究に携わっています。1989年4月に、美術館/博物館、図書館、アーカイヴ、芸術関連機関の新しい連携をめざし、わが国および国際間における文化的感性和芸術関連情報の創発的な協働のために開設されました。

さまざまな出来事や資料を記録・共有する作業は社会生活の根本をなす人間の営みですが、その理念や技術は現代の情報社会で急速に変容し、飛躍的に発展しています。芸術関連のドキュメントの持つ豊かな可能性は、研究・教育機関のみならず、地域のコミュニティーや個人的な活動でも開発される局面にあるでしょう。

本学会には、図書館司書、学芸員、アーキヴィスト、情報科学研究者、美術史・文学史・音楽史・メディア史・文化史・自然史研究者など、約300名・機関の正会員、学生会員、賛助会員が所属しています。従来の美術館/博物館・図書館・公文書館・アーカイヴおよび学会といった機関や職能を超領域的に融合する新しい学術団体として、本学会は、新しい未知な課題に取り組む方々の参加をえて、活動を展開しています。

本学会は、アート・ドキュメンテーション研究会として創設され、1999年に日本学術会議の第18期登録学術研究団体（情報学・芸術学）に加入後、2005年4月に現在の学会名に改称しました。その後、伝統ある英国美術図書館協会（ARLIS/UK & Ireland）の *Art Libraries Journal* (2013, Vol.38, No.2) の「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号の刊行に協力するなど、国際的視野にもとづいて現代社会の要請する人文学と情報学との連動を追究しています。

主な定期的活動として、年次大会、秋季研究集会、学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』と会員ニュース誌『アート・ドキュメンテーション通信』刊行ほか、さまざまな研究集会・見学会、グループ活動、国際交流を実行

しています。学会内の各委員会・グループはつねに、今日的要請に即したデータベースの構築、アーカイヴ・デザイン、また個別的な応用課題の解決に取り組み、着実な成果をあげています。

■活動内容

- ・研究会、講演会、見学会の開催
- ・地区部会と SIG の活動

現在、関西地区部会があり、自由に参加できます。

また、日常活動の場として、会員の興味に応じて SIG（スペシャル・インタレスト・グループ）を結成することができます。現在、美術館図書室 SIG、デジタルアーカイブサロン SIG、JADS Archives and Archival Methods SIG（学会アーカイブ SIG）、コレクション SIG があり、自由に参加できます。

（地区部会・SIG 連絡先：

<http://www.jads.org/contact/contact.htm#sig>）

- ・学会ウェブサイト（日本語版・英語版）の開設による情報提供・交換及びメーリングリストによる会員交流
 - ・情報・資料の収集・交換・提供
 - ・アート・ドキュメンテーション関係者の交流
 - ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』の発行
 - ・『アート・ドキュメンテーション関連文献目録』の作成・維持（上記『研究』および学会ウェブサイトで提供）
 - ・『アート・ドキュメンテーション関係機関要覧』の作成・維持（学会ウェブサイトで提供）
 - ・ドキュメンテーション関係諸機関・組織との幅広い連携
 - ・IFLA（国際図書館連盟）の協会会員として、美術図書館分科会の活動への参加・協力
 - ・ARLIS/UK & Ireland 等各国の同種組織との連携
 - ・国際会議等参加支援のための助成金の支給
- その他、この会の活動に必要な事業を行います。

■会員の特典

- ・本学会の行う研究会・講演会・見学会などの活動に優先的に参加できます。
- ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』(年3回)、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』(年1回)の配付を受けられます(賛助会員は各2部送付)。

■年会費〔年度単位〕

会員種別により、以下の会費となります。

- ・正会員 6,000 円
(ただし、65 歳以上は 4,000 円 [自己申告制])
- ・学生会員 4,000 円
(大学学部、大学院などに在学中の学生、申込時に在学証明書または学生証のコピーを提出していただきます)
- ・賛助会員(個人または機関・団体) 一口以上
(一口 30,000 円)
- ・団体購読会員 12,000 円

■ウェブサイト

- ・活動の詳細については、学会ウェブサイトをご参照ください。
<http://www.jads.org/>



■入会方法

- ・学会ウェブサイトから「入会申込書」をダウンロードし、必要事項をご記入の上、下記の問合せ先に郵送またはメール添付にてお送りください。役員会にて入会を承認された方に、初年次の年会費の振込用紙を送付します。なお、本学会は会費の入金をもって、入会手続の完了とします。

(入会申込書ダウンロード:

<http://www.jads.org/nyukai/nyukai.html>)



Art Libraries Journal (2013, Vol.38, No.2)

「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号

お問合せ・お申し込み

アート・ドキュメンテーション学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル (株) 毎日学術フォーラム内

Tel : 03-6267-4550 Fax : 03-6267-4555

E-mail : maf-jads@mynavi.jp

2025 年 6 月 1 日現在

memo

JADS

アート・ドキュメンテーション学会
第 36 回（2025 年度）年次大会 予稿集
発行日：2025 年 6 月 14 日（土）
編集：アート・ドキュメンテーション学会

発行：アート・ドキュメンテーション学会
<http://www.jads.org/>